

# 現代用語

2001

ENCYCLOPEDIA OF  
CONTEMPORARY WORDS

創刊53年 since 1948

# の

# 基礎知識

自由国民版 2001.1.1

別冊付録

**NPO・NGOガイド**  
21世紀のボランティア

新世紀・特別付録

**日本国憲法**

巻頭カラー特集

図解でわかるIT革命  
ヒトゲノム全解読MAP  
21世紀への軍事プロフィール

こども・カラー特集

バブル経済からIT革命へ……の巻

**日本新語・流行語大賞 [全記録]**

自由国民社



# バリアフリー社会

## 用語の解説



古瀬 敏

建設省建築研究所第一研究部長

こせ・さとし 1948年佐賀県生まれ。東京大学建築学科卒。建設省建設研究所第一研究部長。著書は「安心快適な高齢者配慮住宅」(共著)「デザインの未来」「ユニバーサルデザインとはなにか」「バリアフリーの時代」など。第1回ロコ・メイス記念ユニバーサルデザイン賞受賞。

### 21世紀への視点

### 加速する高齢化に対応できるバリアフリー社会をめざして

●バリアフリーにとって二〇世紀は、後追いで問題を解決するのに終始した時代であった。そもそも問題があるとはだれも思いもしなかったところから、実は利用者と環境との間のミスマッチが予想もしないほど大きなものだということをあらゆる側面で認識させられ、小手先の解決を積み重ねたといつてよい。物理環境、社会制度、いずれも例外ではなかった。問題が無視できなくなってから、個別に対策がとられてきた。事前にさばいておくという発想はめったにとられなかった。

●そうした悪戦苦闘の時代を経て、さまざまな障害や不都合を抱えていても個人が自立して生きていける、伝統的な家族関係のしがらみから自由になれる、ということとは日本ではようやく常識になりつつある。これは障害者の自立生活運動が大変な努力をして達成しようとしたことであるが、その変化を加速させたのはやはり人口の急速な高齢化であろう。だれもが障害者になるとはいえないが、高齢者になるのはほぼ必然だから、自分の問題として考えざるをえないのである。住宅の高齢社会対応、あるいは在宅支援をうたった高齢者介護保険などがその現れである。

●このわが国人口の高齢化は、二一世紀に入っても速度を緩めることはない。二〇人に一人しか六五歳以上の高齢者がいない社会では、高齢者は長老として敬われた。しかし、四人に一人が六五歳以上になれば、高齢者であることは当たり前であって、それが例外だった二〇世紀とは根本的に違う仕組みが求められる。自立を当然の前提として年老していくのが団塊の世代であり、多くの局面でパラダイムの変換を成し遂げた団塊の世代は、バリアフリー、いやすべての人のためのという意味でよりふさわしい、ユニバーサルデザインへの転換も同じように成し遂げていくであろう。消費者製品から耐久消費財、住宅、建築物、そして交通機関やまちづくりなどのインフラストラクチャー、いずれをとっても暮らしから切り離せない重要なものであり、どれかがほんのちよっと不都合なだけでも、問題を抱えるであろう人の多さを考えればみすこすわけにはいかない。そうした課題は火急の解決を要する。日本には、対策を誤ってやりなおすだけの時間的・資源的余裕がないのだ。

### バリアフリーの概念

#### ▼バリアフリー

[Barrier-free]

障害者が建築物を使おうとしたときに邪魔になるさまざまなバリア(障碍)を除去しようという考え方。これは第二次世界大戦後に特に議論され実行に移されるようになった。それ以前にも障害者は存在したが、第二次世界大戦がきっかけとなったのは、それまでは障害をもつことが半ば死に直結していたのが、急速な医学の進歩によって、戦闘による負傷で障害者となっても社会復帰が可能となったからである。世界に平和をもたらすために自ら犠牲となって障害をもつにいたった人びとの社会参加を、バリアが阻むというのはあってはならないという正論が世の中を動かした側面が大きい。現在われわれがよく知っている建築物のバリアフリー設計標準がまとまった形でつくられたのは、一九六一年、アメリカ標準としてである。これはその後ヨーロッパにも紹介され、各国にも大きな影響を及ぼしたが、アメリカでは六八年に建築障碍法が成立し、七三年にはリハビリテーション法が改正されて「バリアフリー」のめざすべき方向が明らかになった。しかし、バリアフリーを実行に移そうとすれば、障害者とひとくちにいってもその障害のために



# こころと社会

## 用語の解説



町沢静夫

精神科医・立教大学教授

まちざわ・しずお 1945年新潟県生まれ。東京大学文学部心理学科、横浜市立大学医学部卒業。医学博士。国立精神・神経センター精神保健研究所室長を経て、94年「町沢メンタルヘルス研究所」を開設。立教大学コミュニティ福祉学部教授。著書は「ボーダーラインの心の病理」「閉じこもるフクロウ」など多数。

## 21世紀への視点

## 21世紀のこころのあり方

●現代の日本は、ものは豊かだが、こころはきわめて荒廃しているといわざるをえない。特に青少年のこころは混乱をきわめている。また大人も経済不況のなかで自分の生き方が危機に瀕し、彼らの生涯にあっては未曾有の苦しみがある。

●私たちは敗戦後、このような日本の姿を考えたであろうか。ものが豊かになればこころも豊かになり、それが当然だと信じてきた。しかし、ものとおころの発展のスピードはまったく違うものであった。こころの歩みは遅い。もののお豊かさに見合うこころの豊かさが準備できないのである。

●現代は消費社会といわれる。この消費社会は青年たちの欲望を奔放にさせている。彼らはまた欲望を抑えたり断念することを小さい時からしつけられていない。彼らは衝動性がむきだしになった状態で生きていて一貫した作業ができない。このようなことは彼らに虚無感を生む。自分のコントロールできない欲望を前にして、何もできないからである。

●またわれわれは情報社会のなかに住んでいる。現代は最も対人関係が希薄な時代である。仲間遊びもなく、人と交わることに怯えすらみられる。またそれによって人の気持ちを理解する能力も低下している。閉じこもりの現象はもはやありふれた社会現象であり、情報社会は閉じこもっても怖くない社会なのである。このような基盤からは凶悪犯罪が起こるのも無理からぬことである。

●いま現在私たちが望んでいることは、再び人間と人間の交流ができる暖かい社会をもう一度めざすべきだということなのである。それには青少年は町に出なければいけない。しかしそれでいて、ものへの欲望をほどよく断念しなければならぬ。そして彼らは集うべきである。仲間が集い、議論し、ときには喧嘩し、それでも最後には笑いあえる若者であってほしい。私たちの幸せは意外に身近なところにあるのだということを知ってほしい。科学に左右されるのではなく、自ら科学を自分の責任下においてほしい。

●それとともに、親は先進国ほど幼児教育が遅れていることを自覚すべきである。それはこれから親になる人にも知ってもらいたい。幼児教育の低下は青少年の行動を混乱させる大きな原因のひとつでもある。しつけを自覚的にすること、青少年の仲間がいつもみられること、そうすることがわれわれの将来を少しでも救ってくれるものと信じている。

### 社会問題とこころ

#### ▼少年犯罪の凶悪化

少年犯罪の凶悪化は近年大きくとりあげられ、またそのような事件も頻繁に起こっている。一〇〇〇(平成一二年)には一七歳を中心とする犯罪というふうにくぐられたものである。いままでの少年凶悪犯罪は非行少年の延長として起こっていたが、昨今は概して真面目であるが、孤立しがちであり、そしてまた自尊心が高く、また挫折に弱いというところから起こってくるように思われる。それまで現在の社会で出世しようとしていた考えが挫折することによって一挙に逆転して、裏の世界、つまり犯罪の世界で自分は有名になってやろう、とするブラックヒーローの考えが蔓延している。犯罪を犯すこと、そしてまた人を殺すこと、それ自体が大変英雄的な行為であるというふうには彼らは考え、そしてテレビや新聞が報道することによって、いよいよ彼らはその意識を高めているのである。

彼らはどちらかというと対人関係が苦手であり、いじめられやすい体質をもっていることも事実である。自分の存在感が希薄であるということが彼らの大きな悩みであり、したがって最終的には犯罪の世界で存在感を示し、そのまま人生が終わってもかまわないという覚悟で犯行に及



# 日本経済

## 問題用語の解説



金子 勝

慶應義塾大学教授

かねこ・まさる 1952年東京都生まれ。東京大学経済学部卒業、東京大学大学院経済学研究科応用経済学専攻博士課程修了。茨城大学人文学部助教授、法政大学経済学部教授を経て現職。著書は『現代資本主義とセーフティ・ネット』『市場』『反グローバリズム』『反経済学』『セーフティネットの政治経済学』など。

### 2001年の新語

#### ▼ネットバブル

東証のマザーズやナスダック・ジャパンなど新興企業向けマーケットの設立発表を受け、ベンチャー企業への投資機会をねらうリスクマネー供給が急拡大している中、急成長が見込まれるインターネット関連企業に投資し、のちの株式公開によるキャピタルゲインをねらう投資行動とその裏で生じるネット関連企業への資金供給の偏重。しかし、リスクマネーの供給は始まったばかりであり、企業の価値や競争力を適切に評価できるシステムが確立されておらず、マスコミでの評判、アイデアの斬新さ、経営者のパーソナリティ、ほかの投資家の行動など直感的な判断材料に頼る傾向が強い。また、受け入れ側にしても、これをコントロールするための十分な組織運営、ノウハウ蓄積が行われているとはいえない。さらに、ネット関連企業は歴史が浅く、業績が悪化しても保有不動産の売却などで穴埋めすることができないうえに、経営トップの意向で戦略が大きく変わる。情勢の変化に機敏に対応できる半面、業績が大きく変わりやすいもろさをもっているなど問題も多い。

#### ▼大手銀行の再編

二〇〇〇(平成一二)年三月一四日、三和銀行と東海銀行、あさひ銀行の都市銀行三行は、二段階で事業統合

を進め、二〇〇一年四月に共同持ち株会社を設立し、二〇〇二年春をめどに事業を再構築すると、正式に発表した。しかし、あさひ銀行はこの計画から離脱し、かわりに東洋信託銀行が合流し、一〇月一九日、持株会社名を「UFJホールディングス」とすると発表した。この計画で、日本の大手銀行は「みずほフィナンシャル」(日本興業、第一勧業、富士、「住友・さくら銀行連合」、「東京三菱銀行」、そして「UFJホールディングス」)の四つのグループに集約されることになった。もともと、金融機関の巨大化は国際的な流れではあるが、日本の金融再編には、規模優先で、明確な収益力の強化策が見えず、情報投資も金額ばかりが先行し、その中身がはつきりしないとの批判がある。

#### ▼日本新生プラン／日本新生特別枠

情報技術革命(IT)をベースに、小淵前内閣が取り組んだミレニアム・プロジェクト(千年紀事業を拡大・発展させたもの。ミレニアム・プロジェクトの情報・環境・高齢化の三分野に、教育、福祉が加えられた。森首相は、日本新生プランの具体化として、従来のシェア(配分率)にとらわれずに予算配分ができる特別枠の拡大を想定した。特別枠は、首相の裁量で配分され、二〇〇〇(平成一二)年度予算では、経済新生特別枠として情報通信や環境などを中心に五〇〇億円が設けられた。そし

て、森喜朗首相が表明した日本新生プランの具体化に向け、大蔵省財務省は六月五日、二〇〇一年度予算に設ける日本新生特別枠の検討に着手した。

#### ▼産業新生会議

二〇〇〇(平成一二)年七月、森内閣において故小淵首相が設置した「経済戦略会議」と「産業競争力会議」を統合して、「産業新生会議」の設置が決定された。国際産業競争力強化の視点から時間的な余裕はないとされ、小淵内閣時とメンバーの重複が多くなっている。「産業新生会議」では、経済構造改革を柱としながら、産業の新生に必要な環境整備について、関係大臣および産業界の代表者が総合的な検討を行うことが目的とされている。二一世紀に向けた民需主導の力強い経済成長をめざし、IT(情報通信技術)革命、少子高齢化、環境問題に配慮しながら議論が行われている。具体的には、情報技術(IT)の普及やグローバル競争時代に適した企業活動と雇用制度を実現するための商法改正、企業再編を促す税制や企業年金制度の見直し、労働力の流動化策等が課題とされている。

#### ▼二一世紀経済産業政策の課題と展望

産業構造審議会(通産省の諮問機関、会長・今井敏・経団連会長)が二〇〇〇(平成一二)年三月にまとめた長期ビジョン。通産省は一九六〇年代から、一〇年に一度の割合でその年代



# 世界政治

## 問題用語の解説

李 鍾元

立教大学教授



リー・ジョンウォン 1953年韓国大邱市生まれ。国際基督教大学教養学部卒。東北大学法学部助教授を経て、現職。著書は、『東アジア冷戦と韓米日関係』『日本・アメリカ・中国』（共著）『世紀間の世界政治』（共著）など。

現代用語の基礎知識2001

## 21世紀への視点

## 「国民国家の世紀」から「地球市民社会の世紀」へ

●二〇世紀は帝国主義による世界大戦とともに幕を開けた。一七世紀のヨーロッパに生まれた主権国家は、市民革命を経て、国民国家に衣替えし、自己完結的な領土帝国の建設に向けて膨張を続けた。帝国化は近代主権国家の生い立ちに刻印されたひとつの宿命であった。だれにも干渉されず、自力更生を理想とする主権国家の理念型からすれば、生存に必要な資源はすべて自分の領域内に抱え込まなければならぬ。二度にわたる凄惨な世界大戦は、こうした古典的な主権国家の「発展」の頂点であり、必然的な帰結ともいえる。

●と同時に、それは主権国家体系の変容の始まりでもあった。一九一四年八月を分水嶺に、国家の数の減少と規模の拡大という、それまでの傾向が逆転し、巨大な帝国の解体と、小さな国家群への分裂のプロセスが始まる。しかし、主権国家の量的な拡大は、質的な転換をともなう。小さく分裂した国家はもはや一国だけでは政治、経済、軍事的に「自立」することが不可能となり、相互依存状況は不可逆的に進行した。戦後半世紀の冷戦期は、主権国家を越える世界政治秩序への過渡期として歴史に記録されるかもしれない。それぞれのブロックに属した国は、政治、経済、軍事などすべての面で主権を制約された、「半主権国家」であった。ヨーロッパ統合はその部分的な制度化にほかならない。

●冷戦の終結とともに、グローバル化の波は地球全体を覆い、国境はさらに穴だらけになった。国境を越える資本とモノと一緒に、人も移動し、社会間の接触は急速に増大した。世界を瞬時に結ぶ情報技術は人びとの生活とアイデンティティに革命的な変化をもたらしている。しかし、問題もまたグローバル化する。資本主導のグローバル化は、自由市場経済の恩恵とともに、そのひずみをも世界中にもたらしている。国境を越えて、市民社会を組み込んだ新しい枠組みをつくりあげることができるのか。グローバル化の展望はそれにかかっている。

二〇世紀の最後は、「市場の暴走」を管理する地球市民社会の必要性と、その可能性を示す、さまざまな出来事によって彩られた。

●二〇世紀は、近代がうみだした制度のうち、国家が突出した世紀であった。しかし、新しい世紀の世界政治では、国家、市場、市民社会の複合体がその主役となろう。

国際情勢

2001年の新語

### ▼ミレニアム・サミット

[Millennium Summit]

二〇〇〇年九月六日から八日にかけて、ニューヨークの国連本部で開かれた、国連加盟国の首脳たちによる会議。一九九八年のK・アナン事務総長の提案によるもので、最終的に一五〇カ国以上の首脳が一堂に会し、国際的な首脳会議としては史上最大の規模となった。(国連)ミレニアム・サミットの議題として、アナン事務総長は、四月三日、「私たち諸国民—二一世紀における国連の役割」と題する国連の行動計画報告書を総会に提出した。同報告書は、グローバル化の恩恵を最大限に共有するためのグローバル・ガバナンス(別項)の確立を中心課題として掲げ、①不足からの自由、②恐怖からの自由、③持続可能な未来、④国連の再生など四つの分野に分けて具体的な行動目標を提示した。サミットの全体会議と四つの分科会での議論は、急速なグローバル化にともなう南北格差拡大への危惧に集中した。最終日に採択された「ミレニアム・サミット宣言」は、二一世紀の国際関係が志向すべき中心的価値として、自由、平等、連帯、寛容、自然の尊重、責任の共有の六つを提唱し、平和、開発、環境、人権、弱者の保護、対アフリカ特別支援の必要、国連の強化など各分野別に具体



# パソコン

## 用語の解説

下島 朗

フリーライター



しもじま・あきら 1960年東京都生まれ。武蔵野美術大学造形学部卒。企画会社勤務などを経て、フリーに。著書に「パソコン活用法―挫折しないための基礎知識」「パソコン知ったか辞典」がある。

### パソコンの概要

#### ▼パソコン

[Personal Computer]

パソコンは、パーソナル・コンピュータの略で、個人向けコンピュータといった意味。英語では、頭文字をとってPCとよぶことが多い。コンピュータは当初、非常に大がかりな装置だったが、高性能化の一方で小型化も進み、一九七〇年代後半にはパソコンの原型となるマイコン(マイクロ・コンピュータ)が登場した。その後、八一年にアメリカ・IBM社が、IBM PC(IBM Personal Computer)という名称で小型コンピュータを発売。ここから、PC(パソコン)という呼称が広まった。

#### ▼ハードウェア

[hardware]

本来は、金物といった意味。コンピュータ本体や周辺機器など、形のあるものをハードウェアという。略してハードということも多し。

#### ▼ウィンドウズ・パソコン

[Windows PC]

基本ソフトにマイクロソフト社のウィンドウズを使っているパソコンを、一般にウィンドウズ・パソコンとよんでいる。IBM互換機という言葉もあるが、これは本来、IBM PCと互換性があるパソコンという意味である。また、かつてIBM互換機で日本語を使うにはDOS/V

(「DOS」という基本ソフトを必要としたため、一般にDOS/Vパソコンともよばれた。これに対して、NECはPC-9800シリーズという独自仕様のパソコンを発売していた。これらすべて、事実上、ウィンドウズ・パソコンの仲間といえる。しかし、すでにDOS/Vは不要になり、PC-9800シリーズは後継モデルに移行した。また、IBM互換機でリナックスも使用できるなど、いちがいに定義しきれない面もある。

#### ▼マッキントッシュ

[Macintosh]

アップルコンピュータ社が開発・発売しているパソコン。マックOSという独自の基本ソフトを使い、ウィンドウズ普及前からアイコンとマウスによる操作を実現してきた。現在、パワーマックG4(ジューフォー)、G4キューブ、iMac(アイマック)、パワーブック、iBook(アイブック)といった機種が発売されている。

#### ▼ホームパソコン

[home PC]

明確な定義はないが、家庭で使うことに特化したパソコン的な機器。居間に置くことから、リビングルームPCとよぶこともある。これまで、テレビ型のパソコンなど数種類が発売されている。しかしパソコン型の機器よりも、テレビにつないで使うセットトップボックス(STB)や、ハードディスク等にテレビ番組を録

画できるホームサーバーといった機器のほうが発展している。

#### ▼PDA

[Personal Digital Assistants]

日本語では携帯情報端末とよぶ。パソコンより小型の携帯型の情報機器の総称。日本ではシャープのザウルスの人気が高いが、このほかにウィンドウズCEという基本ソフトを使うハンドヘルドPC、Palm OSという基本ソフトを使うPalm端末、マイクロソフトが新しく提唱しているポケットPCなどがある。

#### ▼周辺機器

[peripheral equipment]

パソコン本体以外の機器を周辺機器とよぶ。プリンタはもちろん、キーボードやディスプレイなど必須の機器も周辺機器である。また、パソコン本体に内蔵されている、ハードディスクやCD-ROMドライブも周辺機器に分類される。

#### ▼ソフトウェア

[software]

コンピュータが作業する手順を、コンピュータに適した形で記述したものを。プログラムとほぼ同じ意味だが、現在のソフトウェアは複数のプログラムの集合体になっていることが多い。パソコン本体や周辺機器など形のあるものをハードウェアとよぶのに対して、形のないプログラムをソフトウェアとよぶようになった。一般にソフトと略することが多い。なお、パソコン上で扱う文書や画像などはデータといって、ソフト



# 世界文明史

## 用語の解説



樺山紘一

東京大学教授

かばやま・こういち 1941年東京都生まれ。東京大学文学部卒。著書に『西洋学事始』『歴史のなかのからだ』『肖像画は歴史を語る』『異境の発見』『西洋中世像の革新』など多数。

### 21世紀への視点

### 文明の価値感、日本からの発信

●二一世紀を迎えて、人類は、そして日本人は、確かに新しい課題に直面しつつある。二〇世紀のある時点まで、世界の諸国はかなり共通の価値観によって、自分たちの進路を設計してきた。もともと、その普遍性といえども、ほんの二〇〇年ほど前に確立されたものだった。

●つまり、一九世紀以降の世界をリードした西欧文明の価値観を基礎とし、いかにしてこれを発展させるか、もしくはこれに接近できるかを激しく競ってきた。もちろん、日本はその競争の優等生だった。発展途上国はといえば、成功と失敗の交錯のなかで苦悶してきたというのが実状であろう。他方で、西欧文明の祖国であるヨーロッパ諸国は、アメリカ合衆国とソ連という超大国のはざままで、みずからの道のゆくえを模索していたようである。

●ところが、世紀末から新世紀にかけて事情が変化した。冷戦の終焉もあって、世界中の諸文明・国家は、それぞれの存在意義や展開の方向について、自前のポリシーをみつけたさざるをえなくなった。国家や社会のあり方、言語や宗教、そして生活のスタイルまで、異なった価値基準を、あらためて意識の表面にはっきりと表示する必要が生まれたと思われる。この事情から、二一世紀は「諸文明の衝突」の時代になると予測する人もいる。諸文明は衝突を繰り返すのか、それとも共存を実現できるのか。いまはまだ、予断を許さない状況にある。

●ここでは、世界史上に登場した諸文明の概略を通観したうえで、それらを比較して、個々の文明の特質を確認するかたわら、またその文明が相互に接触と競合を演じてきた図柄を、追求してみたい。それらはみな、一見すると過去の事象であるかにみえるが、実は過去から現在を通して未来にまで貫通する、人類文明史上の局面や焦点を表すものであろうから。

●これらの追求が二一世紀の開始にあたっての、日本からのメッセージになれば幸いである。これからの日本人は、ただこの列島の姿だけに注意を集中しただけでは、世界の重要な一員として生存していけるわけではないのである。世界文明史への視点が、ことさらに求められるゆえんである。

#### 世界文明史の 基本単位

世界にはいくつの文明が存在したのか。さまざまな考え方があろう。二七という人も、一二という人も。分類の方法はさまざまだが、さしあたり基本となる文明について、概観しておこう。ほかの単位を排除するわけではないのだが。

#### ▼古代四大文明

一般には、先史時代のあとに成立した古代文明は、文字を発明したり、都市文明のさまざまな特徴を創造したものととして、四つをあげる。いちおうは、どれもがほぼ紀元前三〇〇〇年紀に、しかも独立に成立したかみえるからである。

古代エジプト文明は、「ナイル川の賜物」として、その中下流に生まれた。独特の象形文字体系をもち、太陽神をかたどった王フアラオによって統括される国家社会を建設した。ピラミッドや「死者の書」、あるいは高度に発展する農業生産と自然観察によって、成熟した文明を営み、紀元前四世紀まで、自立した地位を保った。

メソポタミア文明は、西アジアのチグリス・ユーフラテス川流域を中心として、乾燥地帯に成立した。シュメール人の楔形文字による粘土板文書に記載された、国家社会の運営のあり方は、すでに高度に発達してい



# 地理・地図学

## 用語の解説



正井泰夫

立正大学教授

まさい・やすお 1929年東京生まれ。東京文理科大学・ミシガン州立大学大学院卒。お茶の水女子大学、筑波大学教授を経て、立正大学地球環境科学部教授を歴任。著書は「日米都市の比較研究」「都市地図の旅」「江戸東京大地図」「世界大地図館」「江戸・東京の地図と景観」など。

## 21世紀への視点

## わかる地理・地図

●二〇世紀が過ぎ去ろうとしている。長い鎖国から目を覚まして近代化へ突入した一九世紀後半、明治政府は、文明開化の旗印のもとで地理教育を重視し、世界のことを知らなかった日本人に警鐘を鳴らした。福沢諭吉の「西洋事情」はたまたさんの地理情報を含んでおり、人びとはびびくりした。「江戸湾」という言葉もなかった当時の日本人にとって、江戸湾は単に海でしかなかった。「日本海」も「太平洋」も単に海だったのである。

●江戸時代、伊能忠敬の日本地図があったとはいえ、それは大まかなものでしかなかった。「江戸地絵図」のような詳しいものは不正確であった。政府はフランスやドイツ、イギリスに範をとって、軍隊を通して正確な地図づくりを始めた。国土全域にわたって地形図や海図などが次々とつくられ、さらに外国・世界地図も民間ベースでつくられるようになった。日本は先進国への道を急速にたどったのである。

●第二次大戦後、日本の地図づくりの基本は軍隊から役所〔建設省(国土交通省)国土地理院、海上保安庁水路部〕へ移り、国土と近海の正確な地図づくりが始まった。航空(空中)写真が利用され、測量機器も進歩した。手がき地図はコンピュータ地図へとかわり、作製のスピードが大幅にアップした。外国への関心も高まり、観光旅行を含めて世界中の地理情報が飛びまわり、地図化されるようになった。

●経済力の向上と技術の発達、国土の姿を大きく変えた。江戸時代の人が見たら、これが日本かとびっくりするであろう変化である。航空機・新幹線・高速道路は、国土面積を時間的に大きく縮めた。秘境には近代的な施設が建ち、わら屋根は文化財化し、大都市はアメリカ化した。高度成長期以前はよくあった大水害は姿を消したが、地震や噴火はまだ知らず不十分である。

●二一世紀へ向けて、いかにして日本独自の自然と文化遺産を後世に伝えるかが大問題となっている。古地図や復元地図が注目を集めるのは単にノスタルジーだけからではなく、今後の日本の国土のあり方を考えるベースともなるからである。建設と破壊を繰り返してきた二〇世紀を終えて、二一世紀の地理・地図学は、グローバル化と電子化という前向きなポーズとともに、自然・文化遺産の保存のために、大いに役立つデータを提供していくことであろう。

現代用語の基礎知識 2001

文化・芸術

### 身近な地理・地図

#### ▼伊能ウオーク

「平成の伊能忠敬 ニッポンを歩こう 二一世紀への二〇〇万人ウオーク」のこと。朝日新聞社主催で、多くの地理・地図・測量関連組織が強くサポートしている大イベント。単に地理・地図知識の普及だけでなく、子どもから高齢者までの参加による国民の健康増進をはかり、あわせて日本各地の風土を知ろうというもの。

原則として「伊能エリア隊」の名のもとに、各都道府県ごとに、三泊四日または六泊七日を歩く隊員と、「伊能デイルー隊」の名のもとに一日だけ、あるいは短い距離を歩く隊員からなる。一九九九(平成一一)年には東京を出発し、主として東日本を歩いて大阪でゴールした。二〇〇〇年には大阪を出発し、主として西日本を歩いて二〇〇一年の一月一日に東京でゴールすることになっている。また、これに関連したさまざまな企画が全国的に行われている。

#### ▼ふるさと発見伊能忠敬道中 地図コンテスト

伊能ウオークをさらに実りあるものにするためにつくられたコンテスト。実行委員会構成団体は、(社)日本測量協会、(社)地図協会、(社)日本地図調整業協会、(社)全国測量設計協会連合会、(社)国際建設技術協会、(財)日本



# 現代美術

## 用語の解説



建畠 哲

多摩美術大学教授

たてはた・あきら 1947年京都府生まれ。早稲田大学文学部卒。国立国際美術館主任研究官、「芸術新潮」編集部を経て、多摩美術大学美術学部教授。著書に『問いなき回答』『未完の過去』、詩集『パトリック世紀』など。90、93年、ベネチア・ビエンナーレ日本コミッションナー。2001年横浜トリエンナーレ、アーティストック・ディレクター。

## 21世紀への視点

## 現代美術をとりまく厳しい環境と新世紀の発展への確かな胎動

●二〇世紀後半の日本の現代美術は、制度的な側面からみれば美術館の主導性が徐々に強まっていった時代であった。特に一九八〇年代に入ってから美術館新設ラッシュが続き、学芸員たちの意欲的な活動が脚光を浴びるようになってきたのである。しかしバブル経済崩壊の余波を受けて、まだ歴史の浅い日本の美術館は早くも「冬の時代」を迎えつつあるといわなければならぬ。税金難で各地の公立美術館は大幅に予算を削減され、また一時期、競い合うようにして設立されたデパート美術館も過半が姿を消してしまったのだ。国立の美術館、博物館も是非の議論が十分になされないままに二〇〇一(平成一三)年四月から独立行政法人化されることになる。美術館とのつながりが強かった現代美術の画廊の経営も当然ながら厳しい状況を強いられるようである。

●そうしたなかにおいて企業の文化財団など、民間による芸術助成の努力が地道に継続されていることは、高く評価されるべきである。免税措置が受けられる寄付の受け皿としての企業メセナ協議会の役割も重要性を増してきている。新聞社とのタイアップに頼りがちだった国公立の美術館も、今後は企業や財団などからのより積極的な資金獲得に活路を見出し、いかざるをえないだろう。

●一方で最近、めだってきたのはアーティストたちやその支援者による自主的なグループ活動である。それも固定的な結社を形成するのではなく、フレキシブルな横のつながりによるプロジェクトが多い。神戸の旧ブラジル移民センターを借り受けて、九九年前半、アート・イン・レジデンスやさまざまなイベントを展開した若手のアーティストたちによるCAPHOUSEのユニークな活動などは、美術館的な方向とは異なった、現代美術と市民社会の新たな結び付きの可能性を感じさせるものである。

●また日本でもようやく大規模な国際展の機運が盛り上がりつつあることも記しておくなければならない。九九年夏には、新潟の広大な農村地帯に内外の一四〇余人の作品を点在させた「大地の芸術祭 越後妻有(つまり)アートトリエンナーレ」が開かれたし、二〇〇一年の秋に開催予定の「横浜トリエンナーレ」の準備も進められている。こうした壮大なイベントが今後定期的に継続しうるだけの支持を受けるかどうか注目されよう。

現代用語の基礎知識2001

文化・芸術

## 2001年の新語

### ▼岡本太郎ブーム

岡本太郎が没したのは一九九六(平成八年)だが、このところ強烈な個性で知られたこの前衛画家の再評価、というよりはむしろ岡本太郎ブームともいえるべき現象が起きている。生前に本人から贈与された作品を中心にした川崎市の岡本太郎美術館の開館(二〇〇〇年)が話題になったばかりではなく、『ユリイカ』など多くの雑誌が特集を組み、また著作も相次いで復刊された。前衛芸術の論客であると同時に、縄文論をはじめとする日本の伝統的な文化への考察が、破天荒な人間性の魅力とあいまって、広範な関心をよんでいるのであろう。若い世代のアーティストたちが、自らの原点として「太陽の塔」などの作品に改めて注目しているという事実も興味深い。

### ▼独立行政法人

二〇〇一(平成一三)年四月から国立の美術館・博物館が独立行政法人化される。独立行政法人とは民営化にはなじまない公共的な事業を国の直営から切り離して効率的に運営する法人のことで、現在ある四つの美術館、三つの博物館が、それぞれ一つの法人にまとめられることになる。単年度予算の枠組みに拘束されず館の裁量権が増す、自主的な財源の確保に積極的になるなどのメリットがあるともいわれるが、何をもちて効



# マンガ文化

## 用語の解説

米沢嘉博

マンガ評論家



よねざわ・よしひろ 1953年熊本県生まれ。明治大学工学部卒。著書に『戦後少女マンガ史』『マンガ批評宣言』『マンガ伝』(共著)など。同人誌即売会・コミックマーケット代表。

## 21世紀への視点

## マンガ文化のグローバル化とマンガ産業の停滞

●戦後まもなく手塚治虫によってスタートしたストーリーマンガは、そのスタイル・中身を進化させ、日本独自の大衆文化、視覚表現になるとともに産業として拡大していった。時代を映す鏡となって時代ごとに見だされてきたヒット作は日本の大衆文化の歴史でもあった。だが一九九六(平成八)年よりマンガ産業はマイナス成長になる。読者のニーズに合わせて、世代、性別、嗜好などによって雑誌が細分化していったことが刊行点数を増加させたが、結果として購買力を低下させることにもなったようだ。二〇〇〇年に入って雑誌や単行本の部数は軒並みダウンし、二〇〇一年、ブームをよんだジャンルも大ヒット作も生まれなくなっている。九八年ごろより全国で急増したマンガ喫茶、大型の新中古書店などが売れ行き不振の原因だともいわれている。ゲーム、アニメなどほかの娯楽が読者を奪ったともいわれる。しかし、それらは逆に新たなマンガの読者を開拓している部分もある。不況、少子化の影響は確実にあるとはいえ、マンガそのものの魅力、活力は失われてはいない。

●マンガ、アニメ、ゲームなどのメディアミックス戦略が人気作を生み、TVドラマ、映画などにマンガが原作を提供するケースは増えている。広告などにもマンガが進出し、教科書などにも取り入れられるなど、さまざまな形で大衆文化、表現としての認知は高まりつつある。アカデミズム側からのマンガ研究への取り組み、公共施設におけるマンガイベントの増加も新しい動きだろう。しかも、マンガは日本独自のエンターテインメントとして海外からの注目が集まり、一部ではアニメとともに文化輸出も始まっている。海外からマンガの研究者さえ訪れるようになってきているのだ。だが、こうした文化的定着は、産業としての停滞と同時に進行しており、商品の氾濫の前で保守的になっている読者だけでなく、送り手側も定番の旧作に頼っているのが実状だ。総編集雑誌、廉価版単行本、文庫、合本、再録雑誌など形を変えての名作の再刊本にコンビニエンスの棚は占められ、新連載もパターン化したものが多い。過去の遺産をくいつくしたら、その後はない。時代とわたりあうメディアとしてのマンガ誌と、時代を超えて読み返されるような作品をつくりだしていかなければ、マンガは衰退していくことになるだろう。二一世紀を前に、マンガは難しいところに来ているようである。

現代用語の基礎知識2001

風俗・流行

### 最近の話題

#### ▼ONE PIECE(ワンピース)

『少年ジャンプ』連載中の尾田栄一郎による海洋冒険少年マンガ。宝を求めて冒険にのりだす少年の、元氣っぱい戦いを明るく描いたもので、ストーリーマンガの本格的スタートといわれている手塚治虫の『新宝島』(一九四七年)の流れを組む正統派でもある。ストリートな楽しさがじわじわと人気をつかみ、TVアニメ化、劇場アニメ化もあって大ヒットとなった。この作品を中心に、低迷が続いていた『少年ジャンプ』は勢いを盛り返し、部数を伸ばし続けている。男の子だけでなく女の子たちにも支持されているようだ。

#### ▼手塚治虫文化賞

一九九七(平成九年)、朝日新聞社主催ではじまった同賞は、審査員の投票制でマンガの優秀作品を選んできたというもので、自社作品を中心に選ばれる出版社主催の漫画賞、大人マンガが中心の「漫画家協会賞」「文春漫画賞」など既成のものとは違ったあり方で注目を集めた。第四期目にあたる二〇〇〇年度から一般投票で一位の作品を最終選考に加える方式となり、『ワンピース』(尾田栄一郎)が推された。この年の受賞作は『西遊妖猿伝』(諸星大二郎)、優秀作は『ドラゴンヘッド』(望月峯



# 広告批評

## の解説

島森路子

「広告批評」編集長



しまもり・みちこ 秋田県生まれ。立教大学社会学部卒。講談社勤務を経て、マドラ出版へ。1987年より「広告批評」編集長。著書は「広告の中の女たち」「わがまま主義」「夜中の赤鉛筆」「広告のヒロイン」など。

### 2000年の広告から

#### ▼ユニクロのフリース1290円(ファーストレイリング)

見ての通りの商品名と値段である。いまでは、とりわけマス広告では、あまり見かけなくなつたが、いわば、これが、広告の基本である。最小限の必要メッセージである。そして、この、チラシのコピーともいえる言葉が、今年の広告界で最も話題になり、最も効果を生んだ言葉とな

## 21世紀への視点

### メディアの変わり目に立つ広告

●二〇〇〇(平成一二)年上半期(一〜六月)のマスコミ四媒体広告出稿量は、新聞(四・七%増)、雑誌(一・三%増)、ラジオ(〇・〇三%増)、テレビスポット(四・四%増)と、すべて好調(電通調べ)。ほかにもCS専門チャンネルの出稿量の増加、インターネット広告費の急増など、新旧メディアともに堅調だった。

●パソコンや携帯電話の広告が、ビールや缶コーヒーの広告のように大量に目についた。さらに後半、ブームの感さえ呈したのがドット・コムCM。プロバイダやEビジネスの広告が次々と登場した。これまで派手なCMを打たなかった証券会社の広告がめだつたのも今年の特徴。

●雪印乳業や三菱重工をはじめとして企業の不祥事が相次ぎ、さらにその対応の悪さが目につき、企業のブランド管理という問題が取りざたされた。食品への異物混入がブーム(?)化し、お詫び広告が絶えないという事態が出現した。

●社会現象化したプレスステ発表に向けてカウントダウンCMが流された。日毎に盛り上げていくという従来のカウントダウンのスタイルを破って、静かに発売を待つ人びとの沈黙に近い表情集に終始して、過熱する報道と対照的だった。

った。理由はいくつもある。

①まず、その価格の安さである。②そして、表現の端的さである。広告の言葉が複雑になり、さまざまの衣裳で飾り立てるのが常態化する中で、突然の直球、それもむき出しのストレートがきた。③しかも、その直球の向こうには、どうも企業の商品づくりの思想、商売上の哲学がかい間見える。④なぜなら、このむき出しのコピーは、むき出しであるにもかかわらず、美しい色とデザインで統一されていて、安さを売りながら、決してチープな印象をもたせな



ユニクロのフリース1290円

いのである。⑤さらに、新聞、雑誌、テレビCMと商品を変えつつ展開する、そのすべての広告が同じテイストで展開されて、結果的にこの言葉が、「安価で、良質で、センスのいいカジュアルファッションを売る」ユニクロという企業の言葉を表わすものとなった。

▼リストラしすぎたら。(リクルート関西・フロムA)

一五段、三〇段が常態化する新聞広告の中で、たった一段、たった一行のコピーが目をつけた。逆にいえば、一行だったからめだつたともいえるが、ほかは何もない、黒ベタのスペースにとにかくこの一言、の力強さである。

「リストラ」は、すでに時代の流行語になっている。再構築するというもともとの意味が風化して、すっかり「人員整理」の意味合いで、日日マスコミにおどりの、人の口の端にのぼっていた。底を打つ気配のない不景気ムードは、さすがに深刻さを増してきている。そこを、この広告は逆手にとつた。

「リストラされたら」ではない、「リストラしすぎたら」。そこが、間